

〈報告論文再録〉

## 民謡収集の芸術と科学へのパーシー・グレインジャーの貢献

チャロン・L・ラグズデイル

(宮澤淳一訳)

民俗音楽におけるパーシー・グレインジャー（1882-1961）の仕事について考察する前に、「民俗音楽」(folk music) の定義をしておくことが有意義かもしれない。

- (1) 民俗音楽は、農民、工場労働者、漁師、船乗り、兵士など、働く者によって生み出される。
- (2) 民俗音楽は口承的な伝統として維持されていく。
- (3) 民俗音楽はそれを歌唱・演奏する民俗音楽家によって再作曲される。
- (4) 民俗音楽は非公式的に何度も歌唱・演奏される。(演奏会場やタキシードや譜面代や印刷プログラムは不要。)

グレインジャーが1905年に民謡を集め始めたとき、すでに多くの収集家が次のような手順を用いていた。

- (1) 先駆的な民謡収集家は、「鉛筆とメモ帳」(pencil and pad) を収集技術に用いていた。彼らは、現われたとおりの演技、言葉、音楽を記録しようと試みた。
- (2) 同じ歌が10名の別個の歌手から収集されることがあった。
- (3) さまざまなヴァージョンから1個の混成的な形式が作り出されることがあった。
- (4) 「誤った」音（教会旋法のいずれかから逸脱した音）や「誤った」リズム（単純なリズム組織から逸脱したリズム）が正されることがあった。
- (5) 歌詞と書き起こされた旋律が組みとなって印刷されることがあった。
- (6) 歌い手たちは認識も特定もされないのが一般的であった。

民謡の印刷された版とは、有名なイングランド民謡〈バーバラ・アレン〉(Barbara Allen)の次の楽譜のようなものである(図1参照)。

Tenor Solo

## Barbara Allen

In Scarlet Town, where I was born, there was a fair maid  
dwell long, idle on my youth days, well a day. Her name was Barbara Allen

Twas in the merry month of May  
The green buds were a swelling  
Sweet William on his deathbed lay  
For the love of Barbara Allen

He sent a servant unto her  
To the place she was dwelling  
Saying you must come to his deathbed now  
If your name be Barbara Allen

Slowly slowly she got up  
Slowly slowly she came nigh him  
And the only words to him she said,  
"Young man I think you're dying"

As she was walking o'er the fields  
She heard the death bell knelling  
And every stroke it seemed to say  
"Hardhearted Barbara Allen"

Oh mother mother make my bed  
Make it long and make it narrow  
Sweet William died for me today  
I'll die for him tomorrow

They buried her in the old churchyard  
They buried him in the choir  
And from his grave grew a red red rose  
From her grave a green briar

They grew and grew to the steeple top  
Till they could grow no higher  
And there they twined in a true love's knot  
Red rose around green briar

図1: "Barbara Allen," unpublished collection of transcribed Ozark Folk Songs, Special Collections, The Shiloh Museum, Springdale, Arkansas.

パーシー・グレインジャーは、民俗音楽とは何か、民俗音楽はどのように保存されるのが最善かについて、2つの記事を書き、自説を述べている。それらは有名な記事であり、いくぶん挑発的でもあった。

ひとつ目は1908年発表の「フォノグラフを用いた収集」であり、録音機器を用いた民謡収集を提唱した――

有能で伝統を引き継ぐ歌い手たちを、目の前で、あるいは、彼らの歌の吹き込まれたフォノグラフ・レコードを通して聴けば聴くほどに、個性や創造性の点で恵まれた人物の歌を書き起こしても、連ごとに異なり、場合によっては歌うたびに異なるその歌の詳細のすべてを再現するのは無理なのであって、書き取ったものは、そうした人物の芸術や芸術的文化的完全を代弁する絵になっているとは言えないのだ<sup>1)</sup>。

さらにグレインジャーは、書かれていない音楽 (unwritten music) の演奏におけるリズム上の複雑さは「誤り」ではないという意見を示した。民謡の歌い手がそうしたリズムの型を一貫性をもって繰り返すという事実は、確固たる意図をもって歌っていることを証明している。好みは分かれようとも、歌い手のリズムは「正しい」のだ。グレインジャーはこう述べる――

すぐれた歌い手の歌は、例えばフォノグラフ・レコードに4度吹き込んだとしても、ほとんど無視できる違いしかなく、その点には驚かされる。記憶力のしっかりした歌い手の場合、どれほど細かな箇所でも、その場の思いつきはほとんどなく、実に小さなリズム上の不規則性も、規則的なリズムに劣らぬ一貫性をもって反復されるのである<sup>2)</sup>。

当時の標準的な収集方法によって作り出されたかもしれない〈バーバラ・アレン〉の版と比較するために、ジョゼフ・テイラー (Joseph Taylor) の歌った〈ラフォード公園の密猟者たち Rufford Park Poachers〉をグレインジャーが書き取った譜面を見よう (図2参照) これはグレインジャーの傑作、組曲《リンカーンシャーの花束》の第3曲となった歌である。(ところで私は、イングランドや北米の民謡歌手たちの歌う〈バーバラ・アレン〉を数十点調べたが、図1の楽譜のように3/4拍子で歌われるのを聴いたことは1度もない。)

1) Percy Grainger, "Collecting with the Phonograph," *Journal of the Folk-Song Society* 3, no. 12 (May, 1908): 151.

2) "Collecting With the Phonograph," 152.

# RUFFORD PARK POACHERS

PHONOGRAPHED AND NOTED BY PERCY GRAINGER

SUNG BY MR. JOSEPH TAYLOR,  
AT BRIGG, LINCOLNSHIRE, AUG. 4TH, 1906.

M.M. ♩ = about 160

With well-sustained rich vocal tone.

*p* < *mf* > < *mp* >

(1) They say that for - ty gal - lant poach - ers there was in 'a mess: They 'ad

6

of - ten been at - tac - ted when the num - ber it wastess. (Chorus) So poach - er bold, as -

11

I un - fold, keep up your gal - lant heart, And think a - bout those poa - che - rs bold, that

16

night at Rō - fut (Rufford) Park 2.A buck or doe, be - lieve it so, a pheas - ant or an

22

'are. Was sent on earth for - ev - 'ry one quite e - qual for to share. (Chorus) So

27

poach - er bold, as - I un - fold, keep up your gal - lant heart, And

31

think a - bout those poa - che - rs bold, that night in Rō - fut Park.

図2：“Rufford Park Poachers,” *Journal of the Folk-Song Society* 3, no.12 (May 1908): 166.

この書き取り譜が、ジョゼフ・テイラーの演奏のリズムやピッチや虚弱をいかに細かくとらえているかに気づいてほしい（ただしグレインジャーは、これを「完全 complete」だとは決して言わなかったであろう）。さらにグレインジャーは、複数の連を書き取るにより、テイラーの歌唱において歌詞の違いによって生み出されるリズムの変化を示した。こうした素材を書き取ることの難しさについて、グレインジャーはこう述べている――

かなりの正確さをもって聴き取ったものであっても、私たちの音楽や言葉の記述方法にはたいへん限界があるため、移されるときには厳密さを失う。伝統的な独唱にみられる大きな、あるいはわずかなリズム上の不規則性を記譜することは不可能だ。リズムの一定していない歌の場合、少しでも厳密にしようとする私の試みの結果は、視覚的にはたいへん見苦しい印象を与えることを告白しなくてはならない。実際の演奏は、風変わりで気まぐれであっても、スムーズなリズムで流れるようだ<sup>3)</sup>。

民謡収集をめぐるグレインジャーの別の独創的な論文に、1915年に書かれた「書かれていない音楽における個性の特徴」がある。彼はそこで民俗音楽の本質についてより率直な見解を表明している。「フォノグラフを用いた収集」同様、民俗音楽を単純化するプロセスへの批判的な態度を崩していない。グレインジャーは、採譜者の音楽的スキルがこの課題に見合うものではなく、複雑な芸術のための音楽を尊重する傾向に影響を与えたのは、民俗音楽が「単純な民衆による単純な音楽」であるという個人的な偏見にはかならない、と説く――

こうした伝統を引き継ぐ歌手たちが、個々人によく現われるさまざまな瘤のような生成物や、あらゆる種類の奇癖のようなものによって、いわゆる「単純な旋律」をある程度装飾してしまうという、その程度を誇張するのは難しいであろう。そうした細かな生成物や奇癖のひとつひとつは、少なくとも最も有能な歌手たちの場合、真の芸術家的個性の貴重な発露にはかならないからである。熟達した採譜者でも、そうした歌唱の吹き込まれたレコードを何百回も繰り返して聴きかなくてはならず、それによって初めて、その歌唱のはかりしれないほど豊富

3) "Collecting With the Phonograph," 152.

な特徴を表する絵をそこから抽出し、紙に書けるのだ<sup>4)</sup>。

グレインジャーは民謡歌手たちの創造的プロセスについて鋭い意見をほかにも述べており、それは民謡編曲におけるグレインジャー本人の創造的プロセスを説明するものでもある。彼はこう主張する——

彼が対決するべき書かれた原曲は存在しないし、彼を批判する根拠となる普遍的に認められた標準も存在しない。彼は実演をする芸術家であると同時に創造をする芸術家である (at once an executive and creative artist)。なぜなら、彼は古い歌を作り直すばかりか、比較的よく知られたフレーズを新鮮に組み合わせて編むからで、彼はこれを「新しい歌を作る」と呼ぶのだ<sup>5)</sup>。

多くの正統派の作曲家たちが、民謡を利用すべきもうひとつの資源としか見なしていなかったとは違い、グレインジャーは、民謡を芸術的発展の豊かな手段と見ていた(正統派の作曲家の中でも、そう考えていたのは彼だけかもしれない)。

作家にとっては人生が、画家にとっては自然が大切であるのと同様、作曲にとっては書かれていない音楽 (unwritten music) が非常に重要である。それは純粹さと自然さの鏡なのだ。書かれていない音楽を通してこそ、音楽表現のための人間の本能の計り知れない多様性の何たるかを知るに到るのだ<sup>6)</sup>。

この1915年の論文の中で、グレインジャーは示唆に富む意見をほかにも述べている。グレインジャーが終生変わらず探求し続けた「ワールド・ミュージック」(“World Music”あるいは“World’s Music”)のテーマに言及しているのである。グレインジャーは、いくつかの文化における、書かれていない音楽の特徴を説明する。彼が知り合ったリンカーンシャー地方の歌手たちばかりか、A・J・ノックス (A. J. Knocks) による録音を通じて知ったラロトンガ島の歌手たちのポリフォニックな即興もそこに含まれる。また、ニュージーランドのマオリ族の歌唱における四分音の使用や、西アフリカ先住民の太鼓打ちの実践するリズムの即興にも言及する。リン

4) Percy Grainger, “The Impress of Personality in Unwritten Music,” *The Musical Quarterly* 1, no. 3 (July, 1915):421.

5) “The Impress of Personality,” 421.

6) “The Impress of Personality,” 427.

カーンチャーの民謡の歌手たちの音楽は、ロンドンの芸術音楽に似るよりも、ニュージーランドの民俗音楽にはるかに似てくる、とグレインジャーは示唆する。

これはたいへん興味深い発想であるし、今日の音楽人類学者たちが見落としている点ですらあるかもしれない。

民俗音楽の本質にグレインジャーが貢献した洞察は、深くかつ広い。そしてそれは、芸術音楽と民俗音楽の違いをめぐる旧来の観念の多くに対する挑戦でもある。注目すべき洞察であり、今回のシンポジウムを通して探求したい考えである。

グレインジャーは多くのテーマをかつてなかったような視点から見据えるようになった——民謡の本質、電子音楽、自前の「フリー・ミュージック」、「オーケストレーション」の概念を拡張する重要性、音楽教育、吹奏楽の重要性、現代の音楽およびバッハ以前の音楽を評価する必要性、さまざまな文化の音楽を評価する必要性、「旧来の知恵」(conventional wisdom)の誤謬を見抜く必要性。

多岐にわたるこれらの関心は、散漫で無節操な思考の結果なのだろうか。それとも、これらをつなぐ論理が存在するのか。一見するとつながりそうにないこれらの関心は、以下に掲げるグレインジャーの態度によって、まとまりを得られるのではないだろうか——

- (1) クリエイティブ・アーティスト 創造する芸術家 (作曲家) と エグゼクティブ・アーティスト 実現する芸術家 (演奏家) の両者に自由を求める願望
- (2) 区分別のない音楽界という理想像 (これは「デモクラティック・ポリフォニー」というグレインジャーの発想に最も雄弁に語られている)
- (3) 十分な待遇や十分な評価を得ていない存在を引き立てる態度 (民謡歌手、オーストラリア人、打楽器奏者、ファクソフオーン奏者など)
- (4) 旧来の知恵に挑もうとする意欲的な態度 (それを熱望と呼ぶ人もいる)

最後に私の好きなグレインジャーの言葉を引用して本論を締めくくりたい。

音楽はいつの日か「普遍言語」になると私は堅く信じている。しかし、音楽に対する私たちの想像力が 1700 年から 1900 年までのヨーロッパ 4 国の産物に限定されている限り、これは実現しない。正しい方向への第一歩は、いかなる偏見も伴わずにあらゆる民族や時代の音楽を見据えること、そして世界に知られ、かつ入手できる最良の音楽を流通させること。その時初めて、音楽を「普遍言語」と呼

ぶことが是認されるのである<sup>7)</sup>。

Percy Grainger's Contributions to The Art and Science of Collecting Folk Song  
by Chal on L. Ragsdale (Professor of Music, University of Arkansas)

Percy Grainger's view of the nature of folk song (what he called "unwritten music") as expressed in "The Impress of Personality on Unwritten Music"(1915) challenged the prevailing view of the time (the early 20th century) that folk music was "simple music by simple folk." In his article "Collecting with the Phonograph"(1908), Grainger made the case for audio recording as the means to collect the work of folk artists as opposed to the practice of attempting to notate the performances with "pad and pencil." With these two articles, Percy Grainger transformed the Art and Science of Collecting Folk Song. Despite Percy Grainger's strong affiliations with Northern Europe, the United Kingdom, and America – he upheld his Australian identity all his life, believing that his mission was to define and explain the nature of Australian Genius to the rest of the world.

© Chal on L. Ragsdale, "Percy Grainger's Contributions to The Art and Science of Collecting Folk Song," delivered at "International Symposium: Percy Grainger's Australian Spirit and Global Mind," Percy Grainger Music Festival 2011, Aoyama Gakuin University, November 27, 2011; revised version for proceedings in *Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies* no.4 (vol.4, no.1, March 2012) .

---

7) Percy Grainger, "Can Music Become a Universal Language? (1933)", in Malcolm Gillies and Bruce Clunies Ross, eds., with Bronwen Arthur and David Pear, *Grainger on Music* (Oxford: Oxford University Press, 1999), 250.